

しんぐうじもんじゆどう
新宮寺文殊堂

所在地：名取市高館熊野堂字岩口中51

現在、熊野神社(旧新宮寺)参道の西側にありますが、明治の神仏分離によりもともとあった熊野神社境内から現在地に移され、熊野山新宮寺の管理となっています。

方3間堂形造の銅板葺で「封内風土記」「熊野三社古跡審上」によれば、天平年間(729～749)に聖武天皇の勅願所として行基により建立されたといわれるが、定かではなく文政2年(1819)伊達齊村公の再興の棟札があります。

II-15



II-15

しんぐうじもんじゆぼさつどう
新宮寺 文殊菩薩像

所在地：名取市高館熊野堂字岩口中51

所有者：名取熊野新宮寺蔵

新宮寺文殊堂内には、本尊である「文殊菩薩」とそれを取り巻いてつき従っている4体の従者「善財童子」「仏陀刹三蔵」,「巖勝老人」「俊城王」が安置してある。

この「文殊菩薩」は、行基の作といわれている。専門家の鑑定によれば、平安時代中期以降の彫刻形式である「香木造り」でつくられており、平安末期の仏像の特徴を備えている。ただ、江戸時代に修理をおこなった際に金箔を施したあとがあり本来のイメージをこわしている。

II-16



II-16

板 碑

II-17-①

板碑は先祖や親しかった亡き人の冥福をいのつたり、自分達の現世安穩(この世での無事)と後世菩提(死後の極楽往生)を願って造立した供養の石碑(卒塔婆)である。とくに鎌倉時代から室町時代にかけて流行したもので、悪仏の奉納・経塚の道標・写経などとともに中世の人々が仏教をどのように理解し、どのように生活にかかわらせていたかを示す資料である。

板碑をたてる風習は關東地方でおこり、他の地方に普及した。石を手し、加工し、文字を刻み、造立し、読経などの供養を行うにはある程度の財力を必要とする。したがって、たてた人々は武士や僧侶が多かったであろう。場所は庵寺や街道筋から発見されることが多いので、寺社などの聖域・墓地、人のあつまる街道の傍などに建てられたと推定されている。

名取市は宮城県内でも板碑が数多く分布するところである。名取市の板碑は安山岩・砂岩などでできており、河川や谷沢からもってきただけの自然石を利用したものが多く、形状に人工的な手をあまり加えていないのが特徴である。碑面の上部に種子(自分の信仰する仏や菩薩を梵字で表現したもの)を大書し、その下に紀年・造立趣旨・佛号(經典にみられる尊など)などを刻している。

熊野堂の大門山は名取市の板碑の大半が集中している地域である。

II-17-①